

ラストフライト

アメリカのスペースシャトル「アトランティス」が、21日夕刻、ケネディ宇宙センターに無事帰還しました。

これによって、1981年以来30年間にわたって行われてきたシャトル計画は終了することになりました。宇宙に憧れを持つものとしては、いささか残念ではあります。

スペースシャトルが登場するまでは、人間の乗ったロケットは全て使い捨てでしたから、打ち上げには膨大なコストがかかっていました。ですから、宇宙との間を何度でも往復できるスペースシャトルの登場は画期的なものでした。

当初は、1～2週間に一度打ち上げてコストを下げようとしていましたが、二度にわたる大きな事故を受け、製造コストや管理経費が膨張し、今では、使い捨てロケットよりも高いものになってしまいました。その意味では、華やかな舞台からの退場は致し方ありません。

しかし、スペースシャトルが宇宙開発に果たした役割は、非常に大きなものがありました。1998年からスタートした宇宙ステーションの建設でも大いに活躍しましたし、何より、地球と宇宙とを何度でも行ったり来たりするスペースシャトルの登場は、飛行機にでも乗るような気軽さで宇宙旅行が楽しめる、そんな時代の到来を予感させるものでした。

人類で最初に宇宙飛行士になったのは、ソビエトのガガーリン中佐でしたが、彼が宇宙にいた時間は1時間50分、地球を1周したに過ぎません。それが今では、宇宙に長期間滞在し、生活する事ができるようになりました。スペースシャトルが、こうした宇宙技術の開発に果たした役割は大きかったと思います。

この30年間、スペースシャトルには、16カ国から350人を超える宇宙飛行士が乗り込み、宇宙を飛行しています。その中には、7名の日本人飛行士

も参加し、日本の子どもたちに多くの夢と感動を与えてくれました。

宇宙開発の歴史を見ると、長い間、国威発揚と米ソを中心とする国家間の闘ぎ合い、競争の中で行われてきました。地上では、二度にわたる大戦後も戦争が絶えず、多くの血が流されています。そして、宇宙でも、如何に自分たちが主導権を握るかと争ってきました。

しかし、今や宇宙開発は、一国の力だけでは進めることができないほど大きなプロジェクトになっています。宇宙開発は国際協調の時代に入ったといえるでしょう。

1992年、日本人として初めてスペースシャトルで宇宙飛行した毛利衛さんは、「宇宙からは地球の国境線は見えなかった」と述べています。

宇宙から見れば、小さな地球で、国境や人種といった様々な線引きをして争っている人類が、つまらなく小さなものに映ったのではないのでしょうか。

宇宙には、平和という言葉が似合います。

私は、日本の子どもたちが、世界の仲間達と新しい宇宙船に乗って勇躍火星に向かって飛行する、そんな日が必ず来ると信じています。

（塾頭 吉田 洋一）